

日本人学生にとってのドイツ語とは

Wilfried Schütte



わたしは1980年4月から広島大学でドイツ語、ドイツ文学を教えています。所属は文学部ですが、総合科学部でも3コマ、1年生と2年生のドイツ語と2・3年生のドイツ語会話を担当しています。わたしの授業にでる学生は文学部、

特にドイツ文学、哲学、歴史専攻の学生です。そのことをわたしは大変うれしく思っています、といいますが、これらの学生は大体において他学部の学生とくらべてドイツ語に対する関心も強いと考えることができますので。最初の2年間がすぎると二度と再びその言語、ないしその言語で書かれたテキストとかかわる必要がないと思われるような場合、誰が一体そのむずかしい外国語を根をつめて勉強する気になるでしょうか。その点もちろんドイツ文学、哲学、歴史専攻の学生の場合は事情がちがいます。最初の2年間でその後の勉強のために、つまりひきつづいてドイツ語、ドイツ文学、ドイツの科学や文化と取り組むために十分な基礎を固めておきたいという気持もっていますから。1981年前期の期末試験は9月の中旬に実施しましたので、その後一回ほど授業時間が残りました。試験をすませた後のこの最後の一回の授業はわたしにとっても学生たちにとっても一番楽しい快適な時間として、きめられた教材のことや次の試験のことにわずらわされることなく、ドイツの歌をきいたりビデオで映画をみたりして一緒に楽しむことができます。ところがこの学期最後の授業に行く前にたまたま日本人のドイツ語の先生に出会ったところ、その先生はわたしがまだ本当に授業するのかと不思議そうな顔をしてたずねるのです。その先生の話では、期末試験をすませた後で授業しても学生は誰も出てこないと言うのです。(しかも、念のためにつけ加えておきますが、この先生は大変に立派な興味おかい授業をされることをわたしはよく知っているのです。)別な言い方をしますと、ドイツ語が大学の最初の2年間に全学生にとって選択必修であるという日本の制度はわたしにはよく理解できません。

わたしのような外国人教師の授業は多くの学生たちにとってきっと特別に骨の折れるものでしょう。それはひょっとしたら南極探険とくらべることがで

きるほどのものかもしれません。ですから、学生たちがそれにもかかわらず毎回毎回出席することは大いに称賛にあたいることと言わねばならないでしょう。それにわたしのドイツ語の授業はきっと日本人の先生の授業とはちがっている点が多いでしょう。授業も日本語ではなく、大ていはドイツ語しか使いません。(時には説明のために英語も少し使います。私の英語が通じているかどうかわかりませんが。)テキストもドイツで出版されたものを使いますし、それはもちろん(文法や単語の説明も)ドイツ語だけで書かれています。それにわたしはドイツ語を聞きとったり、しゃべったりすること、つまり口頭のコミュニケーションの訓練を主眼に授業しています。そういう形でドイツ語を勉強しなければならないということは、学生たちにとっては最初は少々ショッキングなことかもしれませんが、わたしは学生たちがすぐれた会話力を身につけることを目指す場合にはよい方法だと思っています。しかもこの方法は文学作品を読む場合にも重要なのです。文学作品のテキストも一語一語解説するのではなく、それを全体として理解しなければならないのですから。

日本で出版されているドイツ語の教科書はわたしにはエキゾチックな島(それはつまりドイツ語の単語や文例ですが)がいくつか浮んでいる海(それは圧倒的な部分を占める日本語の説明文のことですが)のようにみえることがあります。そのような教科書ではその外国語を学ぶために学生たちには多くの助け船が用意されていますが、わたしの授業では助け船といえば和独の辞書だけです。そしてまたその辞書が実によく使われるのです。ある時わたしはドイツ語の単語を説明するために黒板に顔の絵をかき、それぞれの部分に„Auge“, „Nase“, „Mund“, „Ohr“とドイツ語を書きこみました。書き終って学生たちの方をふり向くと、なんと学生たちは熱心に辞書をめくり、これらの単語の意味をしらべているではありませんか。まあまあ、それもいいでしょう。あるいは方法などあまり重要ではないのかもしれませんが。要は学生たちにとにかくそれらのドイツ語の単語の意味が理解できたということですから。

この場をかりてもうひとつ希望をのべさせていただけば、学生諸君、教室ではもっと前の方へつめて坐って下さい。教室に入って行きますと学生たちは大てい一特に中央の列は—いちばん後の方にかたまっています。まるでわたしが危険な動物(ひょっとしたら毒へびか、大口をあけてほえるライオン)で

でもあるかのように。これらの学生はわたしが黒板になにか書きますと、となりからメガネをかりて、わたしのなぐりがきした小さな文字を読みとろうとしていることがよくあります。もう一度ははっきり言います、わたしはげっしてかみついたりしません。

ここまで書いてきまして、みなさんの中にはわたしが一体誰なのかまだわからない人もあるでしょう。自画自賛したり、自分自身のことを多く語りすぎるのはあまりよいことではありませんので、最後に、ある学生がこの前の期末試験の時、テスト用紙のはしに（英語で）書いていた言葉をここに引用しておきましょう。“Mr. Schutte, you have a fine beard!”

フランス人の見た日本人学生

Gilbert Joseph Louis Vidal



フランスから始めて日本の大学にやって来ると（私の場合で言えば、広島大学）、自然にフランスの大学の思い出が浮んできます。それがフランスの大学の現状であるかどうかはともかく、少なくとも私の知っている大学の姿です。

さて、始めて広島大学の門をくぐると、どんな印象を受けるでしょう。まず、フランスの大学の場合はそうなのですが、威圧的でいかめしい、あえて言えば冷やかな外観に圧倒される、という感じがありません。反対に、広島での第一印象は、この大学は（大学のある）街と一体をなしている。大学は街と共に生き、街は大学と共に大学によって生きているという印象です。（私は、この街で学生や勤め人や教師が、昼のせわしい食事のために集まる数多くの食堂を思い浮かべているのです。）

キャンパスで出会う学生について言うと、彼らは市内の大学以外の場所で見かける若者達と大して違っている様には見えません。フランス人の学生なら、同年代で既に職に就いている若者とは、もっと簡単に見分けがつかず。

更に、運動場・教室・体育館・図書館などから出て来る日本人学生は、フランス人学生ほど、せかせかと大学の建物を離れたがっている様子がありません。多分、彼らは授業が終わってからも、かなり長く大学に残っているのでしょう。大学で行われている多くのサークル活動（スポーツ・音楽・演劇等）から考えて、そうに違いないと思います。

フランスでは、全く様子が違います。壁に書かれた無数のスローガンは、68年5月から、そして今日でもまだずっと“学生の不満”の表現となっています。或いは、少なくとも表現となっていました。“学生の不満”は権利を要求し、政治的行動をおこせと呼びかけています。事実、フランスの学生には、大学に入ったからといって、数年後に免状をもらって卒業できる保証がありません。選抜が、日本では入学時に行われるのに対し、フランスでは入学してから2・3年の間に行われます。ある科目の試験の合格者数が、受験者の65パーセント以下であることも珍しくありません。卒業証書ももらったとしても、職を見つけるという困難な仕事はまだ残っています。特に、文学部の学生には難しいのです。

こうした困難を知っているからといってフランスの学生が大学生活の全体を勉学に費やすという訳ではありません。日本の学生と同じ様に、喫茶店へ出かけて行き、気候が良くなればテラスに陣取って、友達と情熱的で抽象的な会話をとめどもなく続けます。この会話を通じて、言わば“人生観を新たにする”のです。フランスの学生は、映画にもよく行きます。平日であれば、学割がききます。

生活費はどうしているのでしょうか。家族に養われているか、政府支給の奨学金を受けているかです。多分日本より比率は低いでしょうが、自分で働く場合もあります。医学部のように勉学期間が長い場合を除いて、非常に長い間学生の身分にとどまっていることはありません。22・3才頃卒業証書をもらおうと、出来るだけはやく実社会の生活へ入ろうとします。いつまでも大学に長居はしません。

というのも、学生を特に引き止めておく様な雰囲気、フランスの大学にはないからです。一般的に言って学生は、一旦出てしまえば大学とまったく接触がなくなります。多分そこが又、フランスと日本の違いです。日本では、学生と教授はフランスより



<外人に人衆の話をひきよめ
通じんかた --- >

ずっと個人的に知り合って、場合によっては、後々までこの関係が続きます。フランスではそんなことは全くありません。授業時間になると教授が現われ、終るとただちに姿を消します。学生も同じことで、教授がいなくなると後を追う様に退室します。教授に面会の約束をさせたら大手柄の部類に入ります。ともかく、フランスの大学の教授が、廊下や図書館で学生と一緒に、最近の試合の結果を論評し合うなどということは想像もできません。試合といっても、野球の試合ではなく（フランスでは野球をやりませんから）、たとえば、5か国トーナメントの時のラグビーの試合などです。それに又、正直に打ち明けますと、スポーツは“インテリ”の間では少々軽蔑されています。

フランス人学生と日本人学生の学力を比較するのははるかに難しいことです。そのためには、種々の学問分野の莫大な調査が必要になってきて、とても手に負えません。又、そんな風な問いを発してみても、余り意味がありません。ですから、私には、自分の関係している学科、つまり外国語教育、もっと厳密に言えばフランス語教育のことだけに限ってお話しします。フランス語を学んでいる日本人学生は、躊躇なく彼らの苦勞を認めます。それは逆に、パリの東洋語学校の学生が、苦勞の程を隠そうとしないのに似ています。

しかし、ヨーロッパ系の言語を学ぶフランスの若者は、これほど異和感を感じずにすみます。その言葉がフランス語と多くの共通点を持っているからです。そして初期の段階で、ずっと速く上達します。フランスの地理的条件のお陰で、南仏ならイタリア語かスペイン語、東部ならドイツ語を聞く機会が簡単に得られます。実際に使う機会は余りないでしょうが。英語ならラジオをひねればどこでも聞けます。ラジオは英米の歌謡曲を大量に流しています。ところがそれにもかかわらず、日本の中学・高等学校に該当するリセで7年間英語又はドイツ語を学んだ後、このフランス人の若者が、ロンドンかミュンヘンの街角に立つと道も尋ねられないということは、珍しくありません。こんな風ですから、日本人の学生がコンプレックスを感じる必要は全くありません。広島では折角のフランス語の知識を活用する機会がきわめて稀であること、又フランス語は日本語とまったく似ていないことなど考えれば、なおさらそうでしょう。

日本人学生は、長い間ためらった後でないと、外

国語を口にしないというのは本当です。この点では、フランス人学生と大違いです。彼らは喜んで会話に、とびこんでいきます。（フランス人は生来ずっとおしゃべりですから）。最もだからと言って彼らの外国語の言い廻しがそれだけ正確という訳ではないのです。しかし、書かせてみると彼らの大部分が、自分の言いたいことをほとんど誤りなしに表現できます。リセの大勢の生徒の前で授業できる者もいる位です。

結局のところ、フランス語を学び始めるのが大学1年からであることを思えば、日本人学生の一般的水準は、十二分に満足すべきものであり、心良い驚きの念に値します。

さて、次第に遠い過去のことになっていく私の大学時代の思い出と、日本についての余り頼りにならない一連の印象を基に述べてきました比較対照の結びとして、こう申し上げられるかと思えます。細部について違いが見られるとしても、フランスの大学生と“ヒロダイ”の学生の間には、きわだった相違は存在しません。それは恐らく又、世界中の学生が持っている共通点、彼らの若さという共通点のせいでもありましょう。

ロシア語担当、4年目の感想

Lyudmida Petrovna Yamada



今年で、来日6年め、本学でロシア語を担当する様になり、4年めになりました。その間、ロシア語の授業を通じ日本の学生達と接し、日本の学生に対する、私の印象と言った様なものを、わずかな経験ですが、述べてみたいと思います。

教室内における、日本の学生は、大変、真面目に熱心に、そして、大変、おとなしく学んでいます。後者については、後に少し、触れてみようと思いますが。

教材の中で、未知の単語等は、予習、復習で又、授業中にも、辞書を調べ、よく理解しています。ロシア語に限りませんが、日本で出版されている辞書等は、立派な物が、数多くあり、熱心に勉学する学生にとって、大いに助けになっていると思います。

授業中の学生の大変おとなしい態度は、語学の場合、プラクチカの面でマイナスだと思えます。ロシ

ア語の授業、特に、私の担当する授業では、教材の範囲に限らず、まず、積極的に、ロシア語を、話して欲しいと思います。ソビエトでは、予科(教養課程)での語学は、より実際の目的をもって、学習されていると思います。

最後に、私の担当する授業を通じ、日常の会話のみでなく、一人でも多くの学生が、これを機に、日

本に馴染み深い、ロシア文学の作家達と、ロシア語で自由に対話する事に興味を持つ様になれば、どんなに素晴らしい事かと思えます。私も、授業では、いつも、そうした意味で、積極的に、優秀な日本の学生達に接して行きたいと思っています。

1981年10月

〈シリーズ・学問のすすめ〉その16

政治思想史余録

舟橋喜恵



「学問のすすめ」というテーマをいただいたのですが、堅苦しい「学問」をおすすめするより、ちょっと一服して、一杯の紅茶でもいいかが、とおすすめしたい気分なのです。

「学問」と一杯の紅茶では、かなり隔りがあるようですが、小野二郎「紅茶は受皿で」(『展望』、1975年2月号、のちにおなじタイトルの単行本に収録、1981、晶文社)のように、一杯の紅茶の飲み方から、たくみに文明論と作家論にまで言及したエッセイもありまして、そこに描かれたジョージ・オーウェルの振舞は、なんとも興味のつきぬ話題を提供してくれます。

ここでは小野氏ほどたくみな誘導はできませんし、一杯の紅茶そのものを、「学問」の課題とすることもできません。かわりに、一杯の紅茶を飲みながら、思想史の方法とか対象といった堅苦しいテーマには遠慮してもらい、18世紀を代表する二人の思想家をめぐる人間交流というか思想史余録にふれてみようと思います。ただし紅茶の香りをゆっくり楽しむような、ほのぼのとした上品な交流とちがひ、いってみれば大げんか、売られたけんかは買わねばならぬとお互に思ったのか、御兩人とも大まじめ、弥次馬は大よろこび、ついに事態修復はならず、永遠の別れとなったというお話なのです。もともと弥次馬連中には、なにかを起さずにはおかない気配がありましたから、御兩人がまわりに踊らされたということも、たしかにあったようです。

時は1766年、登場人物は18世紀フランスとイギリスを代表する一般の思想家ルソーとヒューム。一つちがひの1712年と1711年生まれで、いまや55才と56才。4年前に『エミール』を出版したルソーは、パ

リ高等法院から逮捕状がでて追われる身でした。ヨーロッパ各地を転々としているとき、熱心にすすめる人があって、ルソーはついにヒュームの援助をうけ、イギリスに安住の地をもとめることになりました。

1766年1月、ルソーはロンドンで大歓迎を受けました。パークをはじめ著名人がつぎつぎと面会にやってきましたし、ルソーの日常は新聞でことこまかに報道されました。ルソーの犬サルタンが行方不明になれば、それが報道され、ヒュームが発見すれば、またそれを新聞がとりあげるといった調子です。国王夫妻さえ観劇にことよせて、こっそりヒュームを御覧になりました。ルソーの方は観劇より犬のサルタンに関心があり、留守中のサルタンのことが心配でたまらず、もうすこしで劇場行きを中止して、国王夫妻をがっかりさせるどころでした。それをなだめすかして馬車へおしこんだのは常識人ヒュームです。

イギリスでは他国に比べて、はるかに報道の自由がありましたから、良いこと悪いことすべて活字になるわけで、ルソーをめぐる話題も、いいことばかりが報道されているあいだは、ルソーとヒューム御兩人の仲も無事でした。3月には、ルソーはウートゥンに移り、かねての希望どおり、「孤独で自由な隠退」生活を始めました。

ルソーは個性的でなかなかユニークな人物でしたから、ヒュームは初対面いらい、ルソーの魅力にとりつかれ、ルソー賞讃をふれまわりました。保護者気どりというところもあったでしょう。ところがヒュームの周辺には、逆にそれを、ヒュームのお人好しとあやぶむ空気もあったわけで、ルソーをもよく知るフランスの友人ドルバックは、「あなたに警告する。あなたが本当のことを悟るのはいたましいことだが、それも遠くない。あなたは相手の人物をし

らないのだ」と、繰り返し忠告しました。ほかにもルソーと仲たがいでいたヴォルテールやダランベールといった文人たちがいて、彼らがヒュームの友人だったことも、事件全体の経過からみれば、ルソーに、ヒュームへの疑惑をふかめさせる一因となりました。ヒュームがパリにいるルソーの宿敵たちとくんで、わなにおとし入れるために、嘲笑うずまくイギリスへ自分をつれてきたと、ルソーはうけたのです。

ヒュームのイギリス人の友人仲間にも、ルソーへの採点のからい人物がいました。彼が事件の発端をつくったのですが、それは当時の文壇スズメの一人、ホレス・ウォルポールで、パリに滞在していました。彼はヒュームのルソーへの心酔ぶりを知っていましたが、野次馬根性おさえがたく、プロシヤ王フリードリヒ執筆という偽の手紙をかいてルソーを皮肉り、友人たちに回覧しました。エルヴェシウスなどは大いに面白がり、フランス語の文章をなおしてやったほどです。内容はごくたわいないものでした。

やがてこの手紙は、ロンドンにいるルソーとヒュームの知るところとなりました。ルソーはすぐ偽書と見破り、宿敵ヴォルテールを犯人だとみましたが、まもなくウォルポールとわかりました。そこでヒュームが大いに怒りウォルポールと絶交でもすれば、ルソーの気持はおさまったのでしょうか、ヒュームは優柔不断で、悪意のない冗談だ、気にするなどといった態度だったものですから、ルソーの神経にピリピリきました。実のところ、ヒュームは、かなりウォルポールにたいし怒ってはいたのですが。

さらに悪いことに、この偽の手紙が、ルソーのウートン移住後、『セント・ジェイムズ・クロニクル誌』に公表され、ルソーがこれに反論をよせるというところまで進展しました。もうそのときは、ルソーはヒュームをパリにいるルソーの宿敵たちの一味とみていたようです。事実はそうではなく、ヒュームはまったくこの事件に関係なく、相変らず保護者気どりで、イギリス国王から年金がもらえるように手ずるをつかって運動に熱中していたのです。怒ってしまったルソーは、ヒュームが年金をうけるとの意志があるかどうか問いあわせても、返事をかきませんでした。

ヒュームの側からみれば、ルソーが偽の手紙事件で不快な気分だとはわかっていても、他方、このイギリスという自由の国では、国王、教会、議会いずれによっても、こういう嘲笑の一文が公表されるの

を権力を発動してもおさえつけられない、それがイギリスという国なのだという考え方があって、のちにヒュームがいつているように、「プロシヤ王の偽の手紙などというつまらない不可避の偶然事のため、ルソー氏がこんなにも感情をたかぶらせているのを見て、気の毒に思った」という程度の理解だったのです。

ルソーから手紙がこなくなりました。しばらくして年金を承諾するのかもしれないのか意味不明の手紙が、ヒュームではなく別人のところへとどきました。妙な雰囲気ヒュームもおかしいと気づき始めたところへ、6月23日付宣戦布告ともいべき手紙がルソーからヒュームへ発せられました。自分の沈黙の原因はヒューム氏よ、あなた自身だ、あなたが友人たちをあやつって自分をイギリスで窮地におとし入れたのだ、という文面でした。つづいて7月10日長文の手紙でくわしい説明がされました。たとえば、有名な話ですが、ヒュームがルソーとともにイギリスへくる途中、宿でヒュームが幾度も「ジャン・ジャック・ルソーをつかまえた」と、フランス語で夜中に叫んだというのです。おそらく寝言でしょう。これは、その後の事件を予測させるもので、恐ろしい身ぶるいを感じたと、ルソーはかいています。さらにロンドンの宿に、スイスでのルソーの敵トロンジャンの息子がやはり泊っていましたが、あれもルソーを侮辱するため仕組んだものだったとか、ルソーへくる郵便物をヒュームが密かに開封していた証拠があるとか、偽の手紙事件はいうまでもなく、ヒュームがいかにも腹黒い人間かという事例をつぎつぎと並べたてました。偽善者ぶって、裏ではルソーを笑いものにして

いるのだというわけです。ヒュームにしてみれば、身におぼえないこと、偶然としかいいようのないことばかりでどうしようもありません。しかしヒュームも今度は本気になって怒って、友人や知人たちに事件のあらましを話して相談しました。事件はぱっと世間にひろまり、弥次馬は大よろこび、ついに期待どおりの展開をみせたというわけです。いったん怒りだすとヒュームもとまらなくなって、ルソーとの往復書簡を全部そろえて注をつけ、ダランベールのところへ送付しました。これはパリで出版されました。さあ材料は全部ですから、どちらに非があるか判定してくれというわけです。そのころの友人への手紙には、つぎつぎとルソーを罵倒する表現が登場しています。論争の文書は、英語にも翻訳されて、同年出版されました。

なぜ文書まで公表して是非をあらそおうとしたの